

# シカによるウバメガシ萌芽の採食害を防ぐために

## <はじめに>

紀州備長炭原木林の伐採地において、ニホンジカ（以下、シカ）によるウバメガシ萌芽の採食によって、ウバメガシ林の再生が難しい地域がみられるようになってきました。このような地域では、被害対策なしではウバメガシを守れない状況にあるため、森林所有者や製炭者が容易に施工できる手法を検討しました。

## <シカの採食害状況調査>

被害対策が必要な地域を明示するため、県内4市町村（4～11箇所/市町村）のウバメガシ伐採地で萌芽の採食状況を調査しました。1箇所につき20株の食害度を調査したところ、和歌山市、旧田辺市に比べてすさみ町、串本町での被害が大きく、ウバメガシ萌芽の食害発生状況には地域差があることがわかりました（図1）。

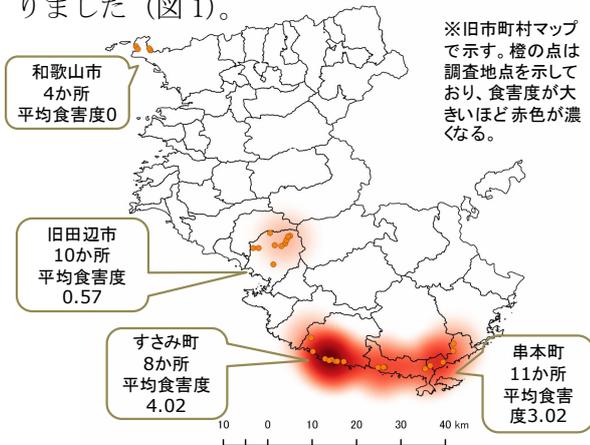


図1 県内4市町村の萌芽の採食状況調査の結果

## <防護資材を使った株の保護方法>

伐採株を保護する手法として、資材の高さと設置期間を検討しました。伐採後約5年間、高さ1m程度の資材で囲えば、食害による株の枯死を回避できる可能性があることがわかりました（図2）。続いて、実用的な株の防護資材を明らかにするため、すさみ町内の伐採地で試験を行いました。処理区は、メタルラス（金属製の網）、枝積み（林地に残った枝で三本支柱を組み、

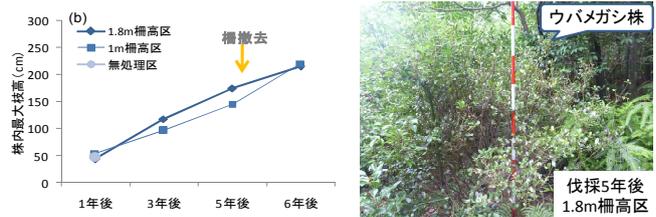


図2 防護柵高の違いによる株の萌芽高の推移

枝葉を積み上げたもの、簡易枝積み（枝で支柱を打ち込み、枝葉を挟み込むよう積んだもの）を設置しました（図3）。結果は、現地で調達可能な枝葉を用いる方法より建築資材のメタルラスで囲う方法が、施工性、耐久性に優れており、株の枯死率も低いという結果が得られました。



図3 検討した3種類の単木防護資材

## <施業による株の保護方法>

施業によって株を保護できないか検討するため、和歌山市と串本町で調査を行いました（図4）。結果は択伐によって株内生存幹を残すこと



図4 伐採から2年以上経過した皆伐株(左)と択伐株(右)

で、株の枯死を回避できることがわかりました（表1）。よって、すさみ町や串本町のように被害が大きい地域では択伐を行うことが推奨されます。ただし、シカによる採食が続けば萌芽成長は期待できませんので、萌芽を保護する対策が必要になります。（経営環境部 山下）

表1 皆伐株と択伐株の枯死率と食害度

調査地	伐採後経過年数	皆伐株			択伐株		
		調査した株数	枯死した株数 (%)	食害度	調査した株数	枯死した株数 (%)	食害度
串本町①	3年	25	15 60	4.3	25	0 0	2.6
串本町②	2年	24	18 75	4.7	24	0 0	2.6
和歌山市	1年	20	0 0	0	20	0 0	0